

## 「Do you know 能？」第四弾

### ～ガイドなら一度は観ておきたい能楽～

2017年7月8日実施 JGA 第一支部研修 終了レポート

2017年7月8日、独立行政法人日本芸術文化振興会 国立能楽堂においてJGA 第一支部能楽研修が実施され、35名（会員31名、非会員3名、運営委員1名）が参加した。

今回は第一部：能楽講義とワークショップ、第二部：能楽普及公演鑑賞という構成。

ワークショップの講師は観世流シテ方女性能楽師の伶以野（レイヤー）陽子師。

演劇ご経験後30歳を過ぎて能楽界に入られ、また米国人のご主人をお持ちの講師は、能の知識がない方・また外国からのお客様に、能楽を説明する難しさをよく理解されており、能の歴史や動き、舞台の見どころなど、通常ご自分がどのように説明されているかを教えてくださった。午後に鑑賞する能「二人静」の台詞の一部を全員で唱和したり、基本の立ち方を練習した後、白足袋に履き替えての能舞台体験。今回は舞台の裏側も拝見した。研修生用とはいえ、本物の桧舞台である。参加者は興奮した面持ちで、鏡の間から役者の気分で「おま〜く」と唱えて橋掛りへ。各々構えの姿勢を取り、しずしずと摺り足で進む。舞台の中央では、講師の助けを借りて面を着けて舞台を眺めてみる。思いのほか視界が利かず、目付柱の重要性が実感された。



その後希望者は館内の食堂「向日葵」にて羽衣弁当をいただきながら歓談。ガイドイングの情報交換や能楽の話など、通訳案内士同士の交流の場となった。

第二部では、最初に東京大学教授 松岡心平氏の「音阿弥、天下無双のマエストロ」と題する解説・能楽案内を拝聴した。続いて狂言「入間川（いるまがわ）」（茂山 千五郎（大蔵流））、能「二人静（ふたりしずか）」（梅若 万三郎（観世流））を鑑賞。「入間川」は当時流行った〈入間様〉という逆さ言葉の遊びを扱った狂言で、台詞の面白さに笑いが起こった。次



いで演じられた「二人静」はシテが一人だけの演出であるが、橋掛りに近い脇正面の席からは、橋掛り（異界とこの世をつなぐ橋）での演技もよく見えた。静の舞で練習した台詞が出てくると参加者の集中度が増した。終盤に向けて舞がさらに深く高まり、舞台終了後、参加者からは「感動した」「素晴らしかった」との感想が多く聞かれた。